

# 接收前の池子の森の暮らし

## ～池子の森の歴史を知ろう～

### 逗子市池子接收地返還促進市民協議会

平成26年11月、米軍池子住宅地区及び海軍補助施設の一部土地約40haが、共同使用開始により池子の森自然公園として開園し、現在は市民と池子住宅地区に居住する米軍家族が共に利用する公園となっています。

しかし、「池子の森」と呼ばれるこの場所は、第二次世界大戦前に旧日本軍によって、この地にお住まいであった方々が強制的に移転させられ、弾薬庫が造営された歴史をもっています。

逗子市池子接收地返還促進市民協議会では、池子の森に弾薬庫が造営される前の暮らし等について、かつて、現在の池子の森自然公園及び周辺の地域にお住まいであった三人の方を講師にお招きして、平成29年3月18日に現地（現緑地エリア 旧柏原村）を見学しながら、お話を伺いました。

#### はじめに、池子の森の歴史について （『池子の森-池子弹薬庫返還運動の記録-（逗子市編集）』より抜粋）

##### 【古代】

古代、今の池子の森のあたりは海岸であったと考えられ、人々の居住に適していた。この場所からは、縄文式の土器や矢じりのほか、弥生時代から古墳時代の遺跡が数多く発見されている。

米軍家族住宅の建設にともなう、平成元年から6年にかけての神奈川県文化財発掘調査の結果、同一地点の下層から年代順に遺構が層をなしており、縄文人から現代人までが同じ場所に住んでいたことを示している点で、貴重であると考えられている。この時発掘された文化財は、池子遺跡群資料館に展示されている。



●池子の森自然公園にて、講師の三人からお話をお伺いしました。



●池子の森自然公園内 池子遺跡群資料館には、県の重要文化財に指定されたものも展示されている。

##### 【江戸時代】

1638年（寛永15年）には、池子村は鎌倉英勝寺領となり、英勝寺が水戸藩ゆかりの寺であったことから、水戸藩領であった。

##### 【明治時代】

明治期に入ると、近隣の状況として1871年（明治4年）、政府は横須賀製鉄所を横須賀造船所とし、軍艦の建造に乗り出した。

1881年（明治14年）に横須賀に海軍機関学校が、1884年（明治17年）には横須賀鎮守府

が創設され、1889年（明治22年）には横須賀線が開通し、逗子停車場（今の逗子駅）ができた。

1903年（明治36年）に横須賀海軍工廠が創設されたこと等により、横須賀は日本海軍最大の軍事施設の道をたどってきた。

##### 【昭和時代】

1937年（昭和12年）に横須賀海軍建築部が、帝国海軍池子火薬庫の造営のため、本日の研修のテーマである、池子と柏原の土地の買収に着手し、昭和13年から20年の6月まで移転が続いた。

昭和の時代に入って、横須賀は日本帝国海軍の最重要基地としてますます増強されつつあった。

横須賀には海軍鎮守府司令部があり、そのもとに多くの海軍施設が置かれた。三浦半島一帯は横須賀軍港のために人・物資をはじめ、あらゆるものが動員された。

三浦半島の付け根、横須賀市に接している逗子町もその一つであり、昭和18年には周辺の町村とともに軍部によって横須賀市に強制合併させられた。

【司会】

池子の森の歴史は、様々な変遷を経て現在に至っている。もともとは自然豊かな土地であり、この地に暮らしていた人々がいらっしやった。

講師の皆さんからは、当時の記憶をたどっていただきながら、池子の森に弾薬庫が造営されていく背景等について、伺っていきたいと思う。

逗子町の戦前の様子、池子弹薬庫の造営について

司会：第二次世界大戦前の世相や、その頃の逗子町での人々の暮らしは、どのようなものだったか。

鈴木氏：当時の思想は軍事色一色だった。三浦半島は横須賀海軍の関係で、半島全体を軍事要塞地帯にするための行動一色に染まって、邁進していた。

司会：横須賀海軍基地が増強されていく様子はどうのようなものだったか。

鈴木氏：現在の横浜市立大学のキャンパス、その辺一帯が横須賀海軍基地の延長で、大きな軍事施設であった。その一部で車両を製造していた工場が、戦後は東急車両に変わった。

全国では東急車両、日本車両、近畿車両と大きな工場が3つあるが、戦後は軍部の車両ではなくて、鉄道会社の車両製造に、大いに活躍して現在に至っているということである。



司会：横須賀を中心に戦時体制が作られていく中で、逗子町はどのような役割を担わされていたか。軍需工場等があったか。

鈴木氏：東逗子と逗子の間の今の逗子警察署の近くにパラシュート工場があった。戦後は、パラシュートの平和利用として、パラアンカーと言って、海の中で広げて大きなタンカーのブレーキに使われたということで、戦争中のパラシュートの産業がずっと続いていた。



●講師の三人 左から、鈴木さん、石黒さん、岡本さん

司会：逗子町での人や物資の動員の様子、またその影響はどのようなものだったか。

鈴木氏：子どもの頃は、軍隊に行くか、海軍工廠へ勤務するか、その二つしかなかった。やはり、軍関係の産業に携わっている町民が多かった。今では想像もつかないが、明治から大正・昭和と、小坪の人たちが船が不足してきて、食べるよりとにかく軍事産業ということで、漁業よりも海軍工廠へ通う方が最優先された。何倍かの収入が得られるので、久木・小坪・沼間の人たち、ことに沼間の方々は交通が不便だったが、当時は電車に乗らずに山を越して横須賀の海軍工廠へ通ったという話を、子どもの頃にずいぶん聞いた。

司会：今の桜山3丁目周辺に、海軍住宅と呼ばれているエリアがあるが、なぜそのように呼ばれるようになったのか。

鈴木氏：横須賀の鎮守府関係の高官の方々の住宅地が、桜山の田越川の近くに、海軍住宅としてまとまってできたという経過がある。同級生にもその子弟がいて、遊びに行ったこともあり、当時の海軍工廠の様子を自慢げに話していた友達のことを思い出す。



鈴木久彌さん 昭和10年生まれ

子どもの頃、柏原村に住んでいた住居が、旧日本軍により強制移転させられた。

柏原村の当時の暮らしの様子を話していただいた。

## 池子地区での暮らしの状況

**司会：昭和18年、逗子町が横須賀市に強制合併された当時の様子はどのようなものだったか。反対運動などはあったのか。**

鈴木氏：当時は政府、ことに海軍が言っていることに關して、異議申し立て・反対ということを口にも出せなければ、態度にも出せないような社会状況だった。

昭和16年8月の末であったか、親父達が逗子の役場に招集をかけられて、「4ヶ月以内に立ち退くように命ず」という紙切れ1枚をもらって帰ってきた。それにも絶対服従ということで、ここ(柏原村)が明け渡しになったという状況で、今では全く想像もつかない。

いわゆる買収価格も、終戦間際になって決まった話で、今ならきちんと納得して決まる話も、後から結果が追いかけてくるようなとんでもない状況だった。

岡本氏：自分が知っている範疇では、反対運動ということとはなかったと思う。今、鈴木さんがおっしゃったように、軍部に楯突くことはできないような時代だったから、これも当たり前かと思う。



岡本勇さん  
昭和13年生まれ

子どもの頃、現在の神武寺駅近くに居住していた。終戦後には、米軍に接収されていた弾薬庫周辺を遊び場としていた。

**司会：なぜ、池子の森に弾薬庫が造られることになったのか。横須賀に近いということもあると思うが、その理由をどうお考えか。**

鈴木氏：私が当時、親や大人たちから聞いていたのは、軍事施設を造る材料と人手不足が関係していて、日本は普通の建物を建てることができない状況になっていた。そこで、昔から生活に使っていたやぐらというものがこの辺にはあって、それに軍部が目を付けて、穴を開けて中に工場を造ったらいい、というような考え方で始まったらしいという話だった。穴を開けて軍事施設を造るというのは、田浦や追浜の方で成功した関係で、この池子地区でも多く造られた。

**司会：石黒さんは、親戚が戦前に「舞台」(旧字名現在の池子住宅地区付近)に住んでいらっしやったと伺ったが、当時の様子で憶えていらっしやることはあるか。**

石黒氏：踏切を渡って逗子中学校の所に四つ角があり、そこが入り口になっていて、弾薬庫の中をずっと歩いて舞台橋(今の逗子中学校のバックネット裏辺り)まで行った所に家があった。今もそこに住んでいた跡がある。その脇には梨の木が植わっていて、今も梨の実が生っている。竹も植えたのだと思うが、その竹藪が茂っており、橋も残っている。高台で日当たりも見晴らしも良く、そこに2~3軒家があったと思うが、皆一斉に移転した。

**司会：日本軍が弾薬庫を造っている当時の様子で、憶えていらっしやることはあるか。**

石黒氏：先ほど鈴木さんも話していたとおり、外国から来た人たち、ほぼ朝鮮半島から来た人であるが、神明社の脇に飯場があり、親方が雇っていた。今の神武寺駅のそばに、朝鮮半島から来た人たちが大勢住んでいた。何年だったか、国が良くなるということで、その人たちが皆帰国してしまった時期があり、(実際にはそのような良いことはなく、とんでもなく大変だったということだが、)空き地には民家が建ち、今では住宅地になっていて、そのような面影は全くない。

山の上に見張りの番兵小屋があり、横須賀の鎮守府から来た水兵が守っていた。夏には白い水兵の制服を着ているのでよく分かるのだが、軍用犬を連れて一日に何回も見回って見張りをしていた。



石黒伸一さん  
昭和10年生まれ

子どもの頃から現在の神武寺駅近くに居住しており、岡本さんとは幼馴染  
鈴木さんとは、逗子小学校での同級生

岡本氏：終戦直後は朝鮮半島から来た人が大勢いたことはよく憶えているし、自分たちの遊び仲間にもいた。その人たちは、この辺の防空壕を掘ったり、弾薬庫を造るためにずいぶん働いてくれたはずであり、気の毒だと思うが、日本人も同じように軍の絶対的権力の中で、何も言えず、何も行動できない状況だった。そういう中で、朝鮮半島から来た人たちは生活力があり、団結力は非常に強かったと思う。

**司会：終戦後、米軍に接收されて弾薬庫として使われている頃、今の逗子高校の脇の辺りに防空壕があって、そこに旧日本軍のいろいろな物資があったということを聞いたことがあるが、何かご存知か。**

岡本氏：そのような話は自分もよく聞いていた。逗子中学と逗子高校の校舎の脇に山がずっと連なっていて、そこに防空壕的な倉庫が掘ってあり、パラシュートやいろいろな機材が入っていたそうである。当時、私は小学校1年生か2年生だったと思うが、大人の人たちがよく取りに行ったり拾いに行ったりして、「これはあそこから取ってきたんだよ」などという話も、よく見たり聞いたりしたものである。私はまだ小さかったので、自分達が行った頃には、もうほとんど何もなかったというような状況だった。

また、終戦からしばらく経った頃だが、市が屎尿処理に使っていたこともよく憶えている。

自分達は、逗子小学校（池子小学校がまだなかった）、逗子中学校に通っており、あの辺りは大変よい遊び場だった。中には何も無くなっていたが、立派な建物の倉庫も残っており、そこで、二股のパチンコの打ち合いをしたり、いろいろな遊びをした思い出がある。遊んでいていつまでたっても帰ってこないということで、親たちに「いつまで遊んでいるんだ」と何度も怒られたことも思い出す。



かしわばらむら

## 柏原村での暮らしと移転の状況

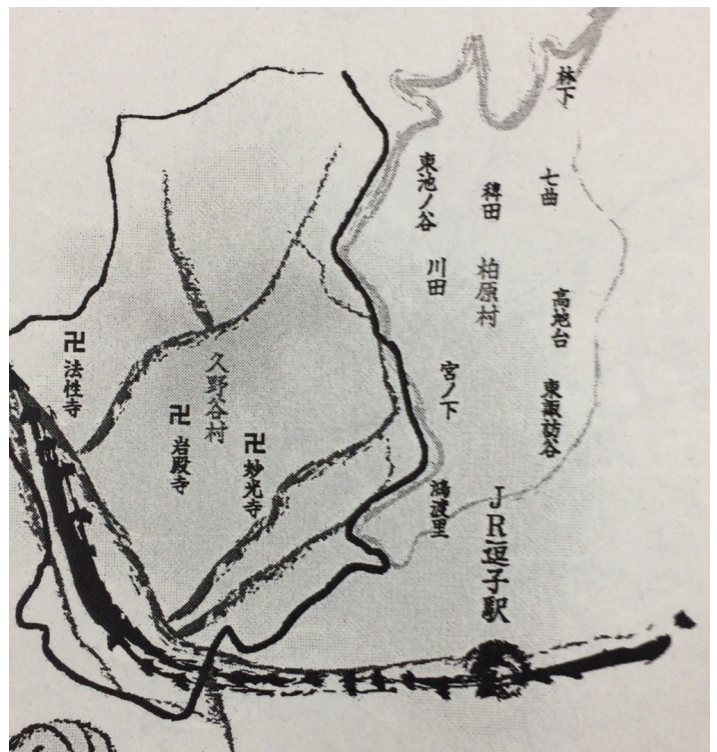
**司会：今の「久木」という地名は昔からあった名前ではなく、柏原村に関係があると聞いているが、名前の由来はどのようなものか。**

鈴木氏：「久木」という地名は、明治の初めに、柏原村と久野谷（くのや）村が合併してできた。「谷」の付く地名は三浦半島に数ヶ所あり、一番近くて大きな所は「釜利谷」（金沢区）である。

明治9年にこの柏原村、室町以前からここに住み着いて村を形成し、あちこちの領地として奪い合われた豊かな小さな村と、久野谷村が合併して、久野谷の「久」と柏原の柏の木偏をとって、「久木」という地名が出来たのだと、年寄りから話を聞いていた。

この柏原村には、たった12軒しか家がなく、今の池子の森の緑地エリアの所に11軒、共同運動場の中に1軒あった。

久木というのはもともと交通の便のよくない谷戸だったので、地元で耕地整理組合という組合をつくって、県の協力を得て、久木川、久木の道路を整理完了して利用していたのに、それもほとんどなくなってしまった。



●地図上、八つの小字が柏原村であった地域  
東諏訪谷（ひがしすわのやと）、宮ノ下（みやのした）、川田（かわだ）周辺が、現在の池子の森自然公園緑地エリアにあたる。

**司会：柏原村での暮らしは、どのようなものだったか。**

鈴木氏：私はこの村で生まれたのだが、子どもの頃、家に鍵がかかっていたのを見たことがなかった。いつ行っても家は開いていたので、のどが渴けば台所に行って水をもらう、ちゃぶ台の上に何か食べる物があれば、布巾をどかしてつまんで出てくるというような鷹揚な家だった。

12軒が分け隔てなく共同生活しているようなもので、暮れになると餅つきは4日も5日も共同でついて回ったので、この間一週間くらいは餅ばかりだったし、餅をつけば年寄り達が今売っている煎餅やかき餅・あられのような物に加工して、それを長く保存食・お菓子として、子ども達が食べていた。

農作物は豊かに出来るので、これを鎌倉と葉山の別荘へ売りに行った。



●鈴木さんが子どもの頃に住んでいた住宅（現在の、池子の森自然公園緑地エリアに建てられていた。）

当時は申請しないとフィルムも買えない時代で、自由に写真も撮れなかったため、写真はほとんど残っておらず、唯一の一枚である。

\*冠木門【かぶきもん】（写真にある入口の門）は、郷土資料館（桜山8丁目）に寄贈移築され、現在も使用されている。

**参加者：お墓はこの敷地内にあったのか。**

鈴木氏：まだ相模の方でもそうだが、古い家は普通は屋敷内にあった。だが、ここは共同墓地みたいに大池の前後、山の中腹にやぐらがあり、先祖は皆そこに葬られた。

**参加者：やぐらのお墓へお参りされることはあるか。**

鈴木氏：子どもの頃にはお墓参りしていたが、今ではもう場所も分からなくなってしまった。

12軒の家がどこにあったか、お蔭様で私は全部記憶にあり、ここで生まれてここで育ち、ここでこのようにおしゃべりができるのは、私が最後だと思う。

**司会：昭和16年に突如、移転の話が持ち上がったとの記載があるが、その当時の様子はどのようなものだったか。**

鈴木氏：余裕のある方で、出て行っても、自分の田んぼなり畑で家建て直せばいいというように安直に考えられる人もいれば、そうでない人もいて、様々な経済状況だったそうである。それで、当時久木3丁目に「グランド」と呼ばれる4,000坪くらいの広い空き地があったので、皆でまとまって引っ越そうということで、私の親父が代表して交渉に行ったが、所有者がなかなか承諾しなくて、8月末から4ヶ月以内に立ち退きを命ずという紙切れももらっているにもかかわらず、すでに1ヶ月半過ぎてしまった。そういう経過があり、海軍工廠の方、県からも応援を得て、ようやく承諾してくれた。そのかわり、第三者に貸している所も全部買い取るように条件が付けられたが、それも承諾して、10軒がまとまってそこへ移転した。偶然にもそのような土地があったのである。

だが、兵役にちょうどよい年代の近所のお宅のおじさん達は赤紙が来て、帰らぬ人になってしまった方が半数以上であった。だから、完成した家には入ることができなかった。

建築といっても、もう金物はないし、材木もよい材料は軍が使ってしまったほとんどないので、引っ越しと同時に、自分で所有している木を急いで伐採して持ち出すという作業もやって家を建てた。建築している途中で、職人が皆召集されていなくなってしまうということもあり、主も戦死してしまい建築も途絶えていたのを、戦後になって完成させて、落ち着いたという方が半数だった。そんな状況だった。



●鈴木家が建っていた場所でお話をお伺いしました。

●旧日本軍が買収する前（昭和8年頃）に生活していた柏原村の区域を、現在の「池子の森自然公園」の写真に重ねたもの



**司会：強制移転後、この池子に弾薬庫が造営されたが、その頃の様子をご存知か。**

鈴木氏：造っている時は、なんであれだけの穴が開くのだろうかと思ったら、日本人とは違って体格の良い、根性のある朝鮮半島から来た人たちが働いているのだということを、まざまざと見せつけられた。

こんなことをやっても戦争に勝てるかなと、子どもながらに考えたということも一つある。「あんな所に穴を掘って、あそこで兵器や鉄砲の弾を造っていて、戦争に勝てるのかな」と言ったら、「お前、よそへ行ってそんなことをしゃべったら殺されちゃうぞ」と脅かされたような記憶もある。

物資はない、人手不足、しかしながら軍の力で大陸関係の方々が関与したからこの弾薬庫ができた。戦後はごたごたして落ち着かないうちに朝鮮戦争が始まって、そこで日本の海軍が苦勞して造った弾薬が全部、太平洋の沖合に行き処理され、ここでも爆発させて処理して、その後米軍の弾薬を入れて、それが収まりきれないうちに、また朝鮮半島の方へ運び出したというような姿を見てきた。

**司会：今私たちがいるこの場所には池があるが、古い地図には池が載っていない。当時、池はなかったのか。池ができた経緯をご存知か。**

鈴木氏：そちらに、今はアスファルトが敷かれたメインストリートがあるが、それは弾薬庫を造るために山の中腹へ穴を掘った残土が埋まった高さである。これは馬車やトロッコを通すために造った道であるが、戦後は米軍の海軍が近代兵器を持ってきて、きちんとアスファルトをかけたのが現在の姿である。



## 池子全面返還は市民の願い・40h a 返還の早期実現を

この今は水が溜まっている池は、何故ここにできたかと言うと、本当は全部同じ高さに埋める予定だったが、埋めきれないうちに終戦になってしまい、ここが低いまま残ってしまった。そこへ旧久木川の上流が閉ざされて、ここへ水が溜まってしまった姿が、現在のこの池である。

だから、私はここは池とは言いきれないので、水溜りと申しあげたい。でもまあ、これだけ水が溜まっているのだから、池と言っても通用すると思う。



本当の池は、これから行く奥にゲートがあり、そのゲートがちょうど昔の柏原村の4割の所で、あと6割はまだ朝比奈峠の方へと奥が深いのだが、その中に二つあった。

私はかつて、水が溜まっている所で泳ぎを覚えた。先輩に池の中へ放り込まれて溺れかかり、夢中で泳いだのがきっかけだった。二つあった池は、長い歴史の中で一つが消えて、大きな水の出の良い方だけが残っているのが現状である。ここが真っ平らでなくて、自然に馴染んだような姿が今残っているのである。

歴史が深いので、いろいろなことがあって複雑多義であるが、何故この池子の弾薬庫で、この柏原地区だけ緑が残ったかということ、ひとつあらゆる面から調べていただいて、皆さんで共に再確認していただければというふうに思う。

**司会：久木中・小学校の共同グラウンドは、昭和52年に返還されているが、その返還された当時の経緯は何かご存知か。**

鈴木氏：共同運動場が何故この柏原の入り口に出て、現在あるかという、これはちょうど日本経済が膨張して、逗子に団地ができて人口が増えると同時に、子どもが増えた。それで学校の教室が足りなくなり、教室ができたと同時に今度は校庭がせまくてどうしようもないということになった。

そこで横須賀の経済界で、通称第八艦隊という横須賀の商工会・経済界の年配者の集いがあり、そこで私とほかの方3人で、「実はこういうことで困っているのだけれど、応援してくれませんか」と言ったら、「よし分かった」と言って交渉に入っていて、返還というか、逗子で利用できるようなことに向いてきた。

それで、どこをどういうふうにしたいのかという話になり、あそこの共同運動場からこれ全部、柏原村の所が残っていて、ほかの話もなく空いているようだから、あそこ全部返還してもらおうように、逗子市で使えるようになりませんか、ということ話が進み、当時共同運動場とともに、旧柏原村全部が返還になるというところまで話があったが、結果は共同運動場だけ自由になって、ここだけが残ったという経過がある。



●柏原地区の一部が返還され、久木中・小学校共同運動場として使用されています。

柏原村追想（鈴木久彌さんご母堂 鈴木千枝さん）

～『柏原』（1987年2月11日発行）より抜粋～

東西の山懐に点在する農家と山峡に深く水田の続く山里、そこが柏原村だった。（中略）農業に従事して、冠婚葬祭等すべて村人が一家同様喜憂を共にした。寄り添い励まし合い素朴に生き続けて来た村人の明け暮れに、青天の霹靂のような事件が起こった。昭和十六年八月、火薬庫建設用地としての、日本海軍の買収だった。すでに物資も労働力も不足している時にもかかわらず、国家への忠誠を誓う犠牲的な取引だった。僅か四ヵ月以内に立退くべしとの軍よりの達しに、故郷を離れる感傷に浸る余裕もなく、追われるように祖々代々の煤けた家財を堆くりヤカーや馬力、牛車に積んで、降っても吹いても、夜を日に継いで泥沼のようになった一筋道を吾先にと村を後に列をなしてゆく有様こそ、柏原村の消えゆく最後の姿だった。時に、昭和十六年の暮れも迫ろうとしていた。

村を出て、すでに三十余年、近くて一番遠くなってしまった柏原を、一人静かに想う時、祖々の霊がそれぞれの家跡に留っているのではなかろうかとさえ思うようになってきた。

(参考) 『池子の森 -池子弾薬庫返還運動の記録-  
(逗子市編集)』より抜粋 P11~15

昭和の時代に入って横須賀は、日本帝国海軍の最重要基地としてますます増強されつつあった。

横須賀には海軍鎮守府司令部があり、そのもとに数多くの海軍施設が置かれた。なかでも横須賀海軍工廠は戦艦の造船、修理などの最大の軍事工場であった。三浦半島一体は横須賀軍港のために、人・物資をはじめあらゆるものが動員された。三浦半島の付け根、横須賀市に接している逗子町もその一つであり、1943年（昭和18年）には周辺の町村とともに、軍部によって横須賀市に強制合併させられたのであった。

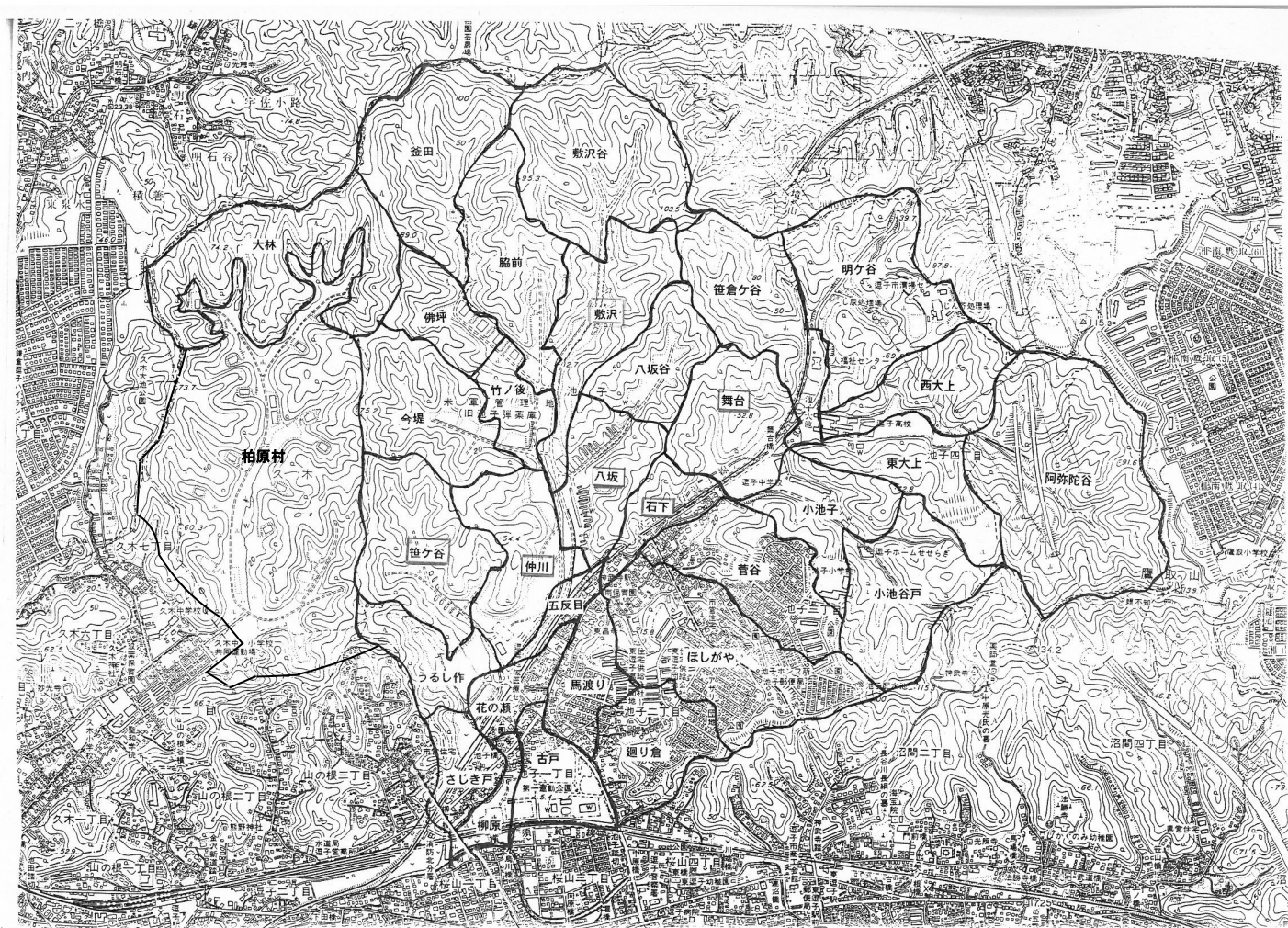
1938年（昭和13年）の逗子町人口20,674人のうち、池子地区の人口は僅か5%たらずの100人程度でしかなかった。明治から昭和初期まで70世帯から100世帯の池子の住民たちは、池子の山間で、こじんまりと農業を続けてきていた。池子村から田越村、そして1913年（大正2年）に逗子町になっても大字池子は、昔のままであった。ただ昭和に入って、池子から横須賀の海軍工廠に働きにでる若者が増えたくらいであった。

池子・柏原地区に1937年（昭和12年）になって、帝国海軍建築部は倉庫（帝国海軍池子倉庫）をつくるために、土地の強制買収を開始した。否応のない強制買収であった。しぶった人たちには銃剣が突き付けられたという話も伝わっている。その後第二海軍空廠補給部が弾薬庫として使用した。

帝国海軍池子倉庫（後の第二海軍航空技術廠補給部池子工場）の造営により、山地、平地ともに大部分を用地として接收され、その結果山はけずられ、田畑は埋められた。

土地家屋は軍事施設のために、買収地域、期日、価格などの一切の協定は不明で、1938年（昭和13年）に池子全域の約3分の2が火薬倉庫地域になった。

戦時色が強まるなかで、軍事施設建設のために住民生活を犠牲にさせられたのは、池子地区だけではなく。首都東京に隣接し、その防衛のために神奈川県下では昭和初期に、軍事施設の移駐・拡大・新設が次々に行われ、神奈川県は強大到軍事施設県となった。



●昭和35年に作成した逗子市全図 池子地区（旧字）と柏原村

『池子全面返還は市民の願い・40ha返還の早期実現を』

逗子市池子接收地返還促進市民協議会 事務局：逗子市経営企画部基地対策課／電話：046-873-1111